

〔玉海〕文治元年十月八日丁巳、和泉守行輔進羊於大將、其毛白如葦毛、好食竹葉、枇杷葉等云々、又食紙云々、其體太無興、

〔伊豆海島風土記〕中、大島之事

羊の多き事、其數難計、五疋七疋あるひは二三十疋宛打むれて、人家近くも出、作物をぬすみ喰ひ、山奥には一むれに、百も二百も打集りて遊ぶ、然るに此ひつじも、むかし上より二疋とかわたさせられしが、子を生じ年を追ふて數彌増、又享保の頃、御用ひの事ある由、二三疋生捕にして奉りける事もありけるゆへ、羊を殺たるものは、おもき罪をかふむる事といひならはせて、追散らす事もせざるゆへ、猶増長して徘徊するといふ、此外の獸は猫鼠ばかりなり、

山羊

〔古今要覽稿〕禽獸ひくひつじ やぎ 夏羊

ひくひつじ一名むくげひつじ一名やぎうは漢名を夏羊といひ、その牡を殺一名殺癩羊、其牝を癩、その黑色なるを黒殺癩、一名黒殺羊、一名骨癩、白色なるを古羊、青色なるを青殺羊、又その角を殺羊角、一名皂莢といふ、先年江都觀場時にこれありしものは、所謂白色のものにて、今肥前長崎に多し、其狀犬に三倍して、家猪よりは少さし、漢客蠻人ともに日用の食品なるによりて、土人これを稻佐立山邊に飼をきて屠るよし、長崎聞見錄其毛長く、角は彎曲して後にむかひ、眼旁及び鼻邊

淡紅を帶て臭氣あり、觀文此即本草圖經に所謂殺羊白色のものにて、膳夫錄にいはゆる古羊なり、一種朝鮮やぎあり、その毛色形狀すべて尋常のやぎに似て、黒斑あり、角少して彎曲して、前に

向ふを異なりとす、同上此即瀛涯勝覽に、鬪羊頗似綿羊、角彎曲向前、上帶小鐵牌と、天中記引いへる類なるべし、又阿蘭陀やぎあり、毛至て長く、額毛垂て眼を覆ひ、角は尋常のやぎに同じ、觀文此即本草

圖經にいはゆる毛長尺餘のものなるべし、又全身黑色のものは、長崎及び薩摩大隅等に多しと

西遊記いへり、さて今長崎にあるは、すべて白色のものなれども、橘春暉が見しは、即郭璞注爾雅に

記